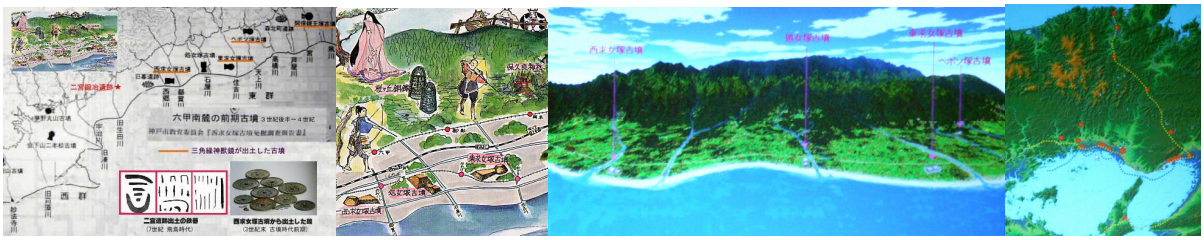
1.

# 古代の神戸の鉄を訪ねて

## 神戸市内の二宮製鉄遺跡と求女塚古墳

### 神戸市内出土の三角縁神獣鏡の足跡が語る古墳時代の鉄の道

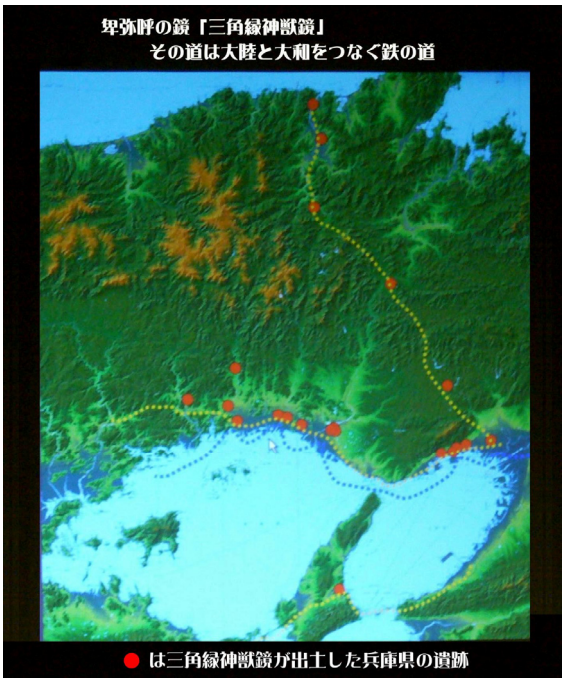
神戸市街の真ん中に出土した 6 世紀末から 7 世紀の鍛冶工房集落　二宮遺跡　旧二宮小学校跡



古墳時代の鉄の道を示す神戸東部の海岸沿いに立ち並ぶ古墳時代初期の古墳群

　淡河から三木にかけての古代製鉄の可能性について聞きに神戸市の埋蔵文化財センターを訪れた時にかねてから持っていた疑問「神戸市内に製鉄遺跡はないだろうか・・・・」と質問。
「たたら跡は見つかっていないが、三宮の市街地に古代の鍛冶工房迹が出土している。」と教えてもらった。
　また、別の機会に「酒蔵の立ち並ぶ灘の浜にならぶ 3 つの大きな古墳とそこから出土した三角縁神獣鏡。
　ここから、見えてくるのは　古代　大和への鉄の道ではないか・・・・」と。
「古代の製鉄関連遺跡が神戸市内の真っ只中にある」とうれしくなって、これらを訪ねて歩きました。
　また、暴論ではあるのですが、調べている間に「この神戸の鉄の道を守る主は物部氏　大和王権成立に深くかかわった・・・」と思い至りました。

神戸の地は古代　畿内の西端　西から瀬戸内海をたどれば、最初に落ち着く港である。六甲の山が海に落ちる須磨の海岸　今は難なく越えられるが、荒々しい山肌を剥き出す難所であり、後世の西国街道も須磨の手前で山中に折れて山中を西に道をとる。　義経の鵯越逆落としの地でもある。
一方、海路に道をとれば潮の流れの速い明石海峡　汐待をして進まなければ、とても素人では超えられぬ。
特に　まだ　船の小さい古代　朝鮮半島の鉄を求めて　北九州・朝鮮半島に依存せねばならぬ大和にとって、流通路の確保は重要なポイントである。　大和と結び、神戸の地を支配する豪族がにらみをきかしていたろう。
少々　こじつけ気味であるが、兵庫県で出土した三角縁神獣鏡の出土地を点でつなぐと、畿内攝津の尼崎から大阪湾神戸を播磨へ抜けてゆく重要路　瀬戸内海の道筋と丹波・但馬を抜け、日本海をたどる道筋が見えてくる。
特に　丹波・但馬・因幡とつなぐ道は、数多くの渡来人・製鉄鍛冶の歴史を刻む鉄の道。この鉄の道の存在が大和王権を作った吉備・出雲・大和を結び付けたに違いないと考えている。
こんなことを考えると神戸に古墳・古代にかけて、鉄の集積があっても当然のように思えてくる。その後世の痕跡が、神戸の中心三宮と新神戸の間の市街地に出土した古墳時代末から飛鳥・奈良時代にかけての鍛冶工房　二宮遺跡か。
当時　畿内では大県の鍛冶専業集落が一手に鉄を加工していたと言われるが、屋根つきの鍛冶炉が出土したのはこの神戸と大



県のみでありこの神戸にも専業集落があったと考えられる。

また、灘の海岸東西約 2km の海岸に沿って、西から　西求女塚古墳(全長 110m)・求女塚古墳(全長 70m)・東求女塚古墳(全長 80m)の 3 つの古墳がほぼ等間隔にならぶ 3 世紀後半から 4 世紀初め古墳時代前期頃の古墳。東求女塚古墳が前方後円墳であるが、西求女塚・求女塚古墳は前方後方墳の形式を持ち、東西の求女塚古墳からは卑弥呼の鏡といわれる三角縁神獣鏡が出土している。出土した土器は山陰系といわれ、墳墓の前方後方墳も出雲と深い関係にあると見られ、これらの古墳の被葬者は日本海側・出雲との関係が深いとも見られる。

（　古墳時代の前夜　明石川流域などに古墳が築かれるのに対し、この六甲南麓には古墳がなく、
突如　前期の前方後方（円）墳が現れてくる。この 3 つの古墳もそんな古墳である。　）

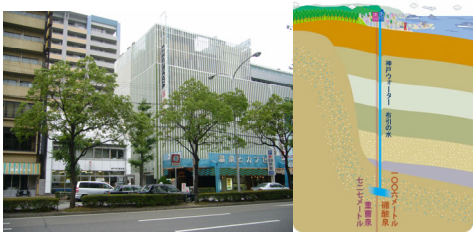
北九州がその集積のほとんどであった「鉄」がちょうどこの古墳時代前夜　出雲・因幡にも大量に集積されるようになり、出雲・山陰の日本海側では　朝鮮半島と独自の供給ルートを持っていたと思われ、先進地であった九州北部と大和の地位が逆転したのみこの鉄の存在とも考えられる。

これらのことから、神戸には、古代　大和王権が確立されてゆく古墳時代から、鉄と関係深く、大和王権と深くかかわった山陰系の豪族がいて、西からの鉄の通商路を確保する役割を果たしていたと考えられる。

それは誰か・・・・・　中国山地の吉備から出た物部氏ではないか・・・・・・

そして、神戸には　この時代から鉄の集積があり、鍛冶工房が営まれていたと考えられ、その痕跡が生田川の東岸に営まれた二宮鍛冶工房遺跡につながって行ったのかもしれない。

## 1.1.　飛鳥・奈良時代の鍛冶工房集落　「二宮遺跡」を神戸の市街地に訪ねて　2006.9.6.



神戸クアハウス・布引の水

神戸　三宮周辺市街地と二宮遺跡の位置

「二宮遺跡は　JR 三宮駅の北東に約 1km　三ノ宮駅のすぐ東　二宮筋をまっすぐ上がって　東西に走る山手幹線

を渡って、数百 m 入ったところ。 旧二宮小学校の跡地で、今は高層マンションになっている」と教えてもらう。三宮の繁華街を避けて　原チャリでいつも抜ける道である。この周辺は六甲山が平地部に出た山すそで緩やかな傾斜地が海岸へと延びている。六甲の山際　新神戸駅のところで平地に出た生田川がまっすぐ南の海岸へ流れ下る。古代　この生田川はこの新神戸駅のところから斜めに南西側にまがって、三ノ宮駅の方へ　現在の神戸のメインロード　フラワーロードを流れ下っていた。　その川の東岸に二宮遺跡があり、反対側西岸には生田神社のある生田の森が広がっていたという。　ちょうど　六甲から流れ出た水が扇状地を伏流水となって海岸に流れ下る一体である。

三宮から北へ 10 分ほど二宮筋の狭い通りを上って、東西に走る山手幹線にぶつかる。この角に道を挟んで神戸クアハウスの「神戸ウォータ　布引の水」水汲み場と「天然温泉」のビルが建っている。

「布引の水」は、「神戸港で積んだ布引の水は赤道を越えてもくさらず、美味しさもかわらない。コウベ・ウォーターは世界一の名水」と語り継がれた名水であり、ここから、東側西宮にかけての海岸沿いには酒蔵が立ち並ぶ「灘五郷」宮水の郷である。また、この周辺は 1995 年阪神淡路大震災でひどくやられたところで、被災した二宮筋をただ無言で通った記憶がある。今はもうそんな痕跡も見当たらないが、二宮小学校も震災後　周辺の小学校と統合され、廃校となった。

**【二宮遺跡の現状と周辺】**

南側三宮方面　旧生田川

北側布引方面　旧生田川

西側　山手幹線

生田川から　布引・新神戸駅方面

遺跡の南西　加納町 3 丁目の交差点で

遺跡の東側を南北に流れる現生田川

三ノ宮から北へ歩いて　東西に走る山手幹線にぶちあたり、さらにクアハウスのところを北に入ると二宮遺跡

二宮遺跡跡　現在は高層マンションになっていて、マンションの広場の隅に交番と旧二宮小学校跡の石碑が建っている

「こんなビルの立ち並ぶ場所　二宮遺跡はわかるだろうか・・・」と震災後にたどった道を思い起こしながら、クアハウスの横を入ってゆくとクアハウスのすぐ北隣にＬ字型に立てられた大きな高層住宅があり、この北側隣のビルとの間　幅 20m ほどで高層住宅に沿って奥へ伸びる広場があり、この北隅に二宮交番の小さな建物があり、その前に「二宮小学校跡地」の石碑がありました。交番の中に入って聞いても「旧二宮小学校」のことはわかるのですが、ここに古代の鍛治工房集落があったことはほとんどわからない。

　震災後、周辺の小学校とともに統合し、この二宮小学校の跡地に大規模な共同住宅を急いで建てるのに先立つ調査で、校庭から数多くの竪穴住居跡と共に 3 基の鍛治炉が出土。この場所はちょうど旧生田川東岸の自然堤防

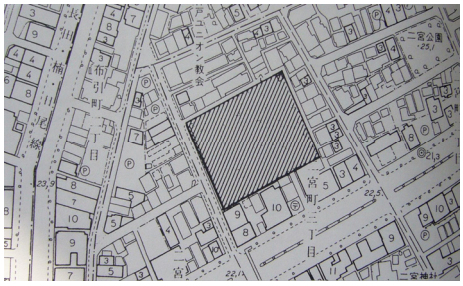
の上にあり、幾多の洪水に見舞われながら、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落である。特に 600 年頃　飛鳥時代の遺構からは 2 基の鍛冶炉が出土し、周辺には湿度よけに溝が掘られ、柱を建てて屋根を葺いた構造であり、鍛冶炉の周辺には竪穴住居５棟　掘立柱建物１０棟があり、武器である鉄鏃　鎌・鋤先・刀子・釘・やりかんなどの農耕具などが出土し、この時代には　専業鍛冶工房集落であったと考えられている。

（神戸市埋蔵文化財センタ　二宮遺跡資料より）

## ■　二宮遺跡　　神戸の市街地に古代の製鉄遺跡　二宮鍛冶工房跡遺跡

（神戸市埋蔵文化財センタ　二宮遺跡資料より）

二宮遺跡　飛鳥時代(7 世紀)の鍛冶工房跡　3 基の鍛冶炉が出土し、そのうち 2 基に屋根があった。
屋根つきは畿内の大専業鍛冶工房　大阪府柏原市・大県遺跡に続き 2 例目である。　1999.3 月



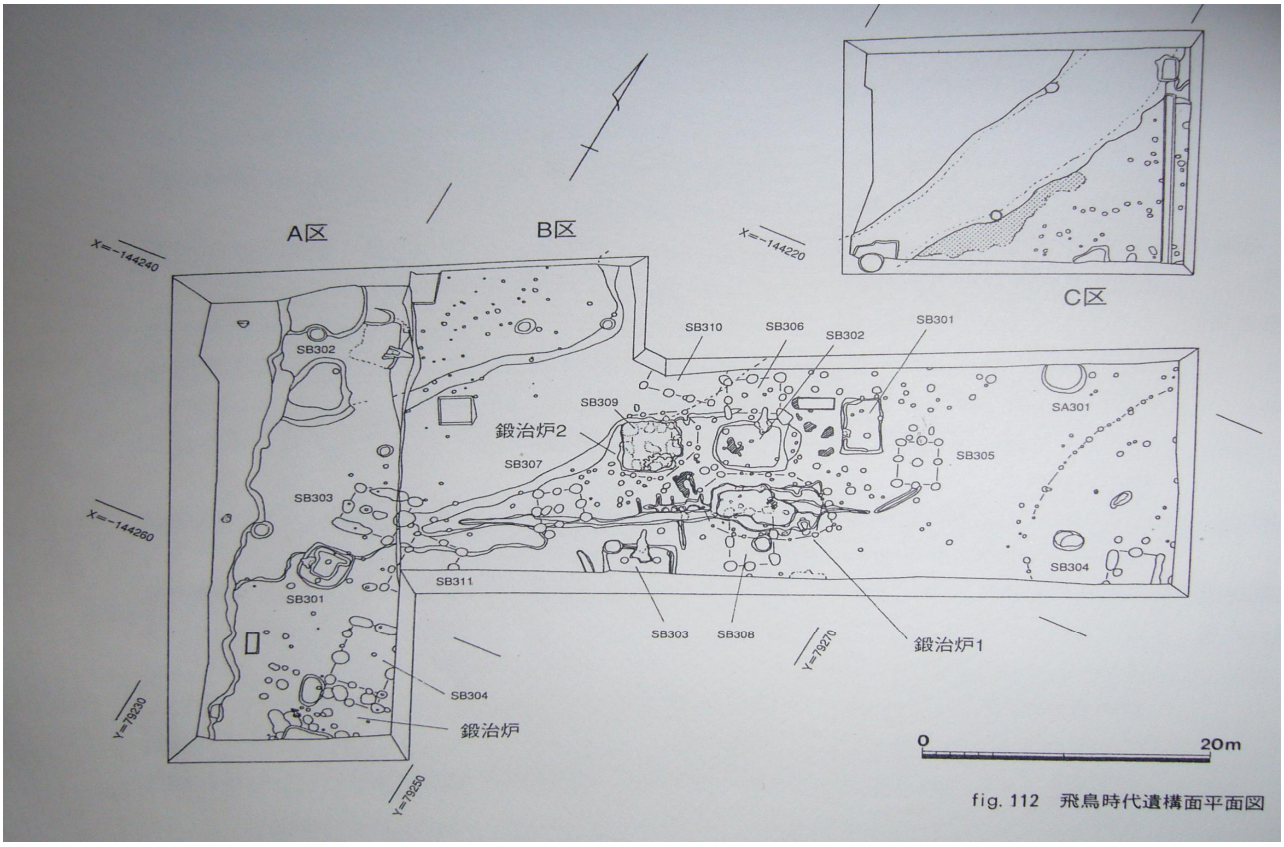


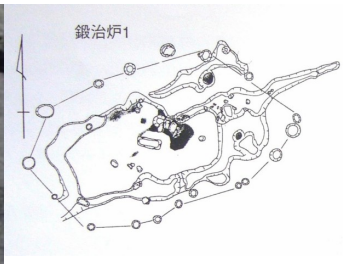

fig. 112　飛鳥時代遺構面平面図

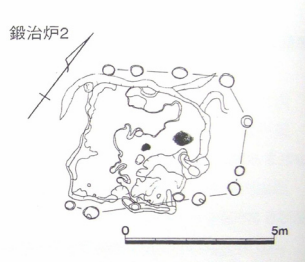
鍛冶工房跡が出土した飛鳥時代の遺構 B 地区

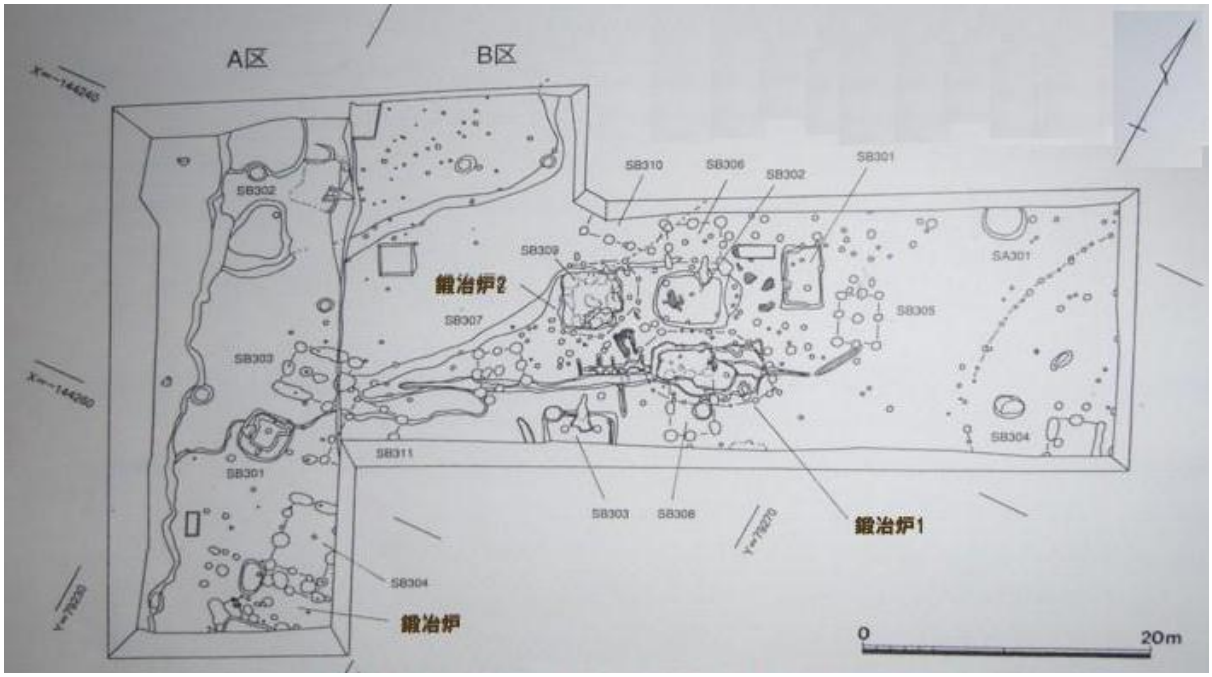
生田川の護岸跡　C 地区

## 二宮鍛冶工房跡遺跡　出土した鍛冶炉

神戸市埋蔵文化財センター　「二宮遺跡」調査まとめ報告より




何度も公園にはいったり、周りの町内の道をまわっても、ここに鍛冶工房があったとの実感はなく、遠い昔の話である。でも、何度となく、「神戸市内に製鉄遺跡がないか・・・」と探していて、やっとめぐり合えて満足である。

神戸の西北端　押部谷に大和葛城山麓の渡来の鍛冶集団「忍海」の痕跡　そしてまた、伊川谷に製鉄集団と縁の深い「物部氏」の痕跡が見られるが、私にとっては　神戸市内で実際の鍛冶遺跡の場所が確認できたのは初めてである。残念ながら、あまり評価されなかったのか、地震の後の集合住宅建設に集中されたのか、詳細な資料もその後の研究もされていない。

７世紀初頭　ちょうど大陸・朝鮮半島の鉄にかわって、鉄の自給生産が本格化して行くと共に　鉄の需要が急速に高まる時代である。大和か日本統一を成し遂げ、その支配力を一層強めてゆく時代である。

鉄の覇権をめぐって　日本各地で多くのドラマがあったろうと思われるが、神戸はそんな中にまったく登場しなかったのですが、この鍛冶工房がどんな役割を演じていたのか　興味津々。

　震災から復興した町並みにそんなことを重ねながら、三宮までまた　戻ってきました。

2006.9.6.　Mutsu Nakanishi

せめて、「発掘時の様子・出土品を示す写真がないか」とインターネットを探すと、阪神淡路大震災時　神戸各町の震災の様子を記録した写真ライブラリーの中にこの二宮遺跡発掘調査の写真がありました。
震災で大きなダメージを受けた二宮小学校周辺　そして、復興のため　急いでそこに高層共同住宅を建てる用地として、急いで発掘調査されたことを物語る資料です。

■　災記録写真（大木本美通さん撮影）　二宮小学校　二宮町３丁目　より整理

中央区二宮町にあった市立二宮小学校が統廃合になるため、校舎の撤去工事中に、
校庭から飛鳥時代の鍛冶工房が見つかった（震災とは直接関係なし）

撮影者：大木本美通　　撮影日付：1999.3.4　撮影場所：中央区二宮町３丁目
撮影対象地点：中央区二宮町３丁目；

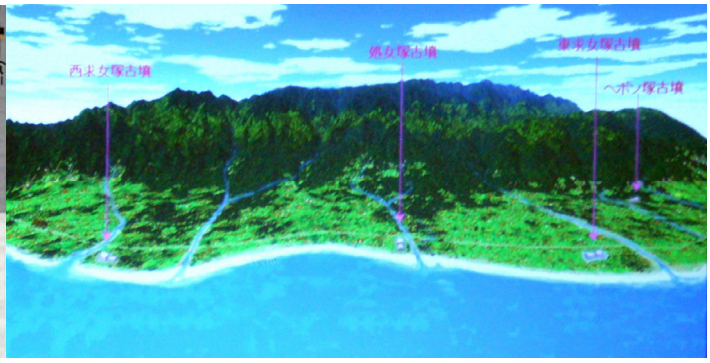
１号鍛治炉周辺　　２号鍛治炉周辺

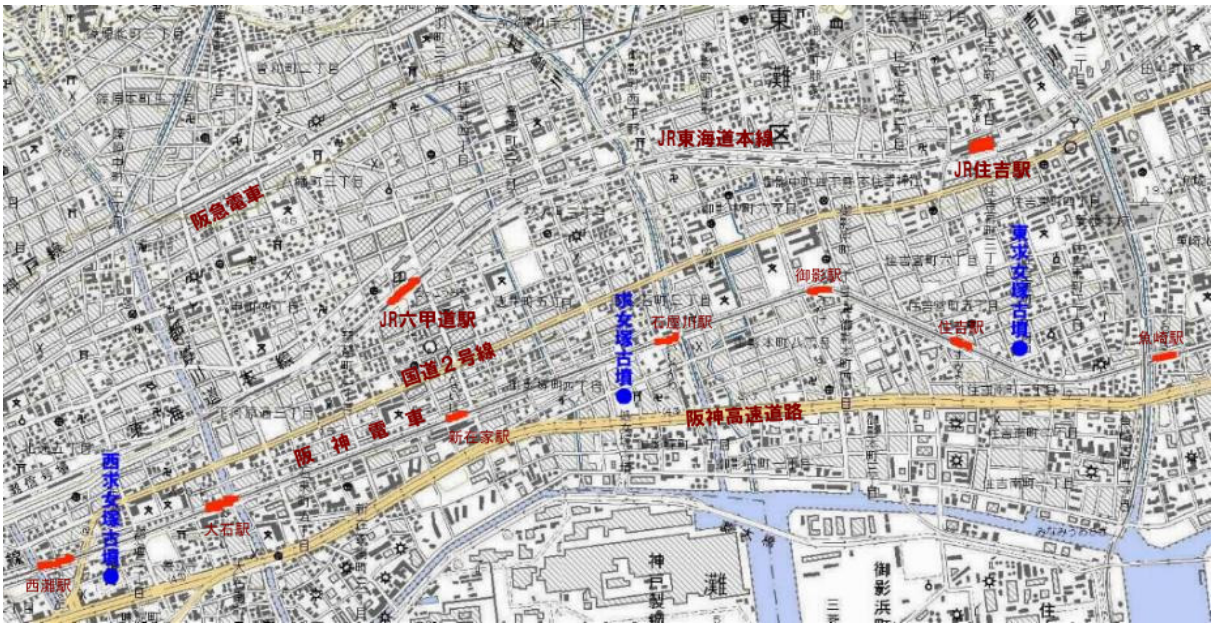
二宮遺跡　出土品

1999.3.4.　大木本美通さん撮影ライブラリーから再整理しました
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/photo/oogimoto/each/004497.html

## 1.2.　古墳時代　神戸の海岸に建ち並ぶ古墳群が示す古代　和鉄の道

西求女塚・求女塚・東求女塚古墳を訪ねて　灘酒蔵の街を walk　　2006.9.6.



西求女塚古墳

求女塚古墳

東求女塚古墳

神戸市東部　灘の海岸線に沿って西から西求女塚・求女塚・東求女塚古墳の３つの古墳が東西に約２キロの間に並んでいる。

これらの古墳が作られた　３世紀後半は大和纏向に出雲・吉備・そして九州からやってきた天皇家などが集まってきて、畿内の大王勢力を形成し、大和王権が成立する時期であり、この神戸の地に畿内の大王勢力と密接に結びつく、豪族がいて瀬戸内の通商路をにらんでいたとかんがえられる。しかし、これらの古墳が築かれる以前　この地には古墳などこの地を支配した首長と思われる大きな墳墓もなく、また、これらの墳墓を作った大集落がどこにあったのかもよくわかっていない。

西求女塚・求女塚は前方後方墳　東求女塚古墳は前方後円墳であり、東西求女塚古墳からはそれぞれ複数枚の三角縁神獣鏡が埋納されていた。また山陰系の祭祀土器や数多くの鉄製品が出土している。

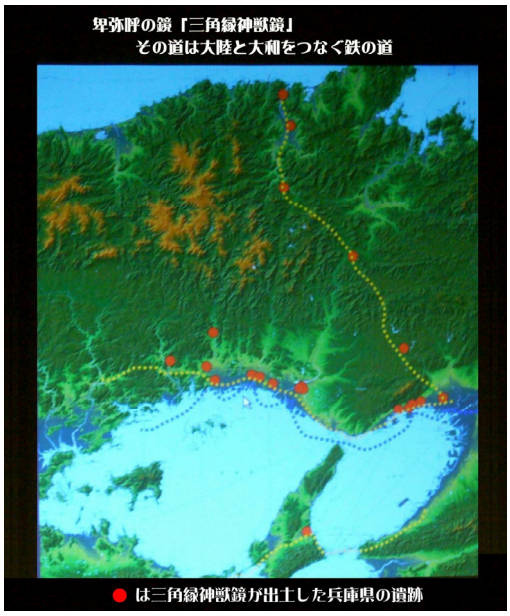
これらのことを考えると、大和にとって、この神戸の地が瀬戸内の通商路の要衝であり、山陰と関係の深い大和と結ぶ豪族がこの地に進出してきたとも考えられ、それらをつなぐキーが「鉄」でなかったか

大和にとって、まだ「鉄」が自給できぬ時代である。鉄の供給地　大陸・朝鮮半島と大和を結ぶ瀬戸内海・日本海の通商路の確保は最重要ポイントであり、通商路の確保に最大限の力を尽くしたと考えられ、それがその通商

路沿いに卑弥呼の鏡と言われる三角縁神獣鏡の供与となって現れている。

　畿内の大王勢力・大和王権成立の最大メンバーが当時　大陸・朝鮮半島と鉄の交流を持ち、北部九州とともに鉄の王国でもあった瀬戸内海を制する吉備　日本海側に王国を築いた出雲・丹後であり、「鉄」が纏向でこれらの王国を結び付けたとも考えられる。

　ちなみに　三角神獣鏡とともに大和の象徴となった前方後円〔方〕墳や、記紀神話には出雲への配慮がにじみ出ている。
また、祭祀に用いられる特殊器台は吉備にその起源があり、大陸の鉄を持ち、文化の先進地北九州と対抗するにはこの出雲・吉備なくしてはなしとげられなかったろう。

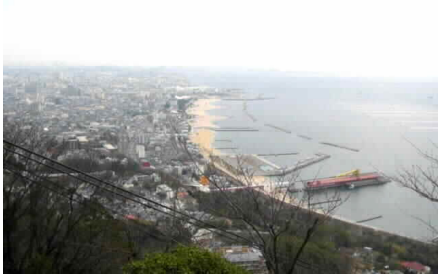



**神戸は大和大王勢力にとってそんなに重要な要衝だったのか????**

六甲の山並みが崖となって　神戸の西で　明石海峡の荒海と明石海峡に落ちて陸路を阻む壁となっている。

　いまは狭い須磨の海岸沿いを国道がすり抜けて行くが、須磨の西塩屋から垂水にかけての海辺を赤石の櫛淵と呼び、鉢伏山が海に迫って、櫛のように出入りした荒磯が続く険しい所で、平安時代まで山陽道は須磨までくると鉢伏山南麓の荒磯をさけて山間を迂回し西進していた。また、海路にしても　明石海峡の荒波を越えるための汐待が必要だった。　古代　西から海路・陸路とも難所を越えて畿内に入る最初の要衝が神戸であったと考えられる。

須磨海岸



鉄拐山山上より須磨浦

須磨浦に落ちる須磨アルプス

また、ほぼ等間隔に並ぶ３つの古墳には次のような能・謡曲になった悲恋の物語が伝えられている。

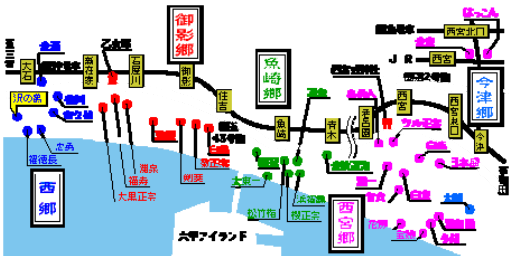
この地に美しい乙女（菟原処女（うないおとめ））が住んでおり、 多くの求婚者がいました。
特に熱心だった 2 人（和泉の“血沼壮士（ちぬおとこ）”と地元の“菟原壮士”） が武器を持っての争いとなり、 乙女は立派な若者を自分のために争わせたことを嘆いて死んでしまいます。
2 人の若者もそれぞれ後を追って死んでしまい、それを哀れに思った人たちが、 後々に語り伝えるために 3 人の塚を築きました。

この伝説は奈良時代の万葉集に登場する歌人たちが歌に詠んでいることから、かなり古い伝説だったようで、 平安時代の「大和物語」では 2 人の若者が水鳥を弓矢で射て乙女を争うストーリーになり、 後の時代にも能・謡曲「求塚」や森鴎外の戯曲「生田川」などとして取り上げられている。

## ■　遺跡をたずねて　灘の街中を Walk

予備知識を頭に９月上旬　阪神電車の普通に乗って、西灘駅で降りる。
阪神間で背後の六甲の山並みと海岸とが迫ったところで、その六甲から幾筋もの川が流れ下る傾斜地がひろがり、

海岸に近い一帯には灘郷の西郷・御影郷の酒蔵が立ち並ぶ町である。そんな酒蔵の町の一角にほぼ等間隔で古墳が立ち並ぶ。酒蔵を訪ねたり、話は聞いたことがあるのですが、意図的に古墳そのものをたずねたことはなし。また、この一体は１２年前の阪神淡路大震災で大きな被害が出た地帯でもある。




東西に伸びるそんな狭い傾斜地を貫いて、一番南側を阪神電車が走る。阪神電車は電車が駅を出発したらすぐ、もう隣の駅が見えるといわれる程駅の間隔が狭いが、特に古い町並みが続くこの一体ではバス停並みに駅が続く。

「西から東に３つの古墳を訪ね、どこかの酒蔵に立ち寄って試飲でもして帰ろう」と西灘の駅に降り立つ。あとは足任せである。

まず、西求女塚古墳を訪ねる。駅を南側に出て西側を南へ流れる川岸にそって、南へ行く。南側に国道４３号線と２号線の合流点で阪神高速道路の高架が伸びる国道４３号線が走っているのが見え、地図では西求女塚古墳はこの国道４３号線に沿った公園の中にある。　国道４３号線に出て、東へ曲がるとすぐ木々の茂った森が見え、求女塚西公園の名が入り口に刻まれている。

## 【西求女塚古墳】

西求女塚古墳　入り口周辺　　2006. 9. 6.

３世紀末頃の前方後方墳　　西求女塚古墳

海岸沿いのあんな平坦な場所に本当に盛上げた古墳があるのか・・・と半信半疑でしたが、石垣で囲まれた公園の中は盛土による平坦な山が築かれ、木々に囲まれて　東西に伸びる古墳がありました。　でも　どうも前方後円墳風に整備されているようですが、実際は 4 世紀始めに築かれた前方後方墳であるという。

北側にも公園の入り口がありました

思った以上に大きく、三角縁神獣鏡を含む 12 面の鏡・鉄製品・山陰系土器等多数の遺物が出土し，畿内の大王勢力との関わりを持つ豪族の墓として古墳時代(4 世紀前半)に築造されたと考えられている。もっとも　この古墳を

作った人たちが住んでいた集落はまだよくわかっていないという。
公園をでて、東に少し歩くと都築川が流れる大石駅の前に出る。

次は求女塚古墳へさらに駅前から東へ家並みを抜けて行くとまた、国道４３号線に出る。このあたりも一番震災の被害を受けたところであるが、もう　その面影はない。大きなマンション郡や新しい家並みがわずかにその痕跡を示しているのみである。
　新在家駅を通り過ぎて　さらに東へ少し行くと十字路に乙女塚の標識が見える交差点。
南東角の高い石垣の上が求女塚古墳。
　西求女塚古墳よりも随分高い。

## 【求女塚古墳】

求女塚古墳(1)　（　左:古墳東南角　　右:南側より全景　）

求女塚古墳(2)　（　左:古墳南入り口　　右:古墳前方部より後方部　）

古墳時代前期築造の全長７０ｍの前方後方墳で、南側の史跡求女塚石碑のある入り口から階段を上ると前方後方墳の前方部　遺跡は南北に北に一段高い後方部がある。後方部へもあがっていましたが、よく整備された平地があるのみ。　この古墳からは石棺、土器、埴輪の破片、勾玉などが出土している。
　前方後方墳として公園によく整備されているからかもしれないが、前方後円墳の形がよくわかる。

求女塚古墳　　求女塚古墳の東側石屋川

求女塚古墳から阪神電車沿いに御影駅・住吉駅に出て、線路の北側にまわって、住宅地をすこし東へ進むと遊喜幼稚園のところに出る。この幼稚園に隣接して広い広場の公園があり、その中央に柵に囲まれた大きな石と石碑が東求女塚の案内板とともに整備されている。まったく古墳の痕跡がみえない公園で、案内板がなければまったく気づかないだろう。でも　残された石やここから土を採取して、阪神電車の線路建設に使ったことなどの記録を考えると随分大きな古墳だったのだろう。

西求女塚古墳と処女塚古墳が遺跡公園として整備されているのに対して、東求女塚古墳は阪神電車住吉駅東の住宅街の真中にあって、明治時代に阪神電車敷設の土取りで取り壊され、現在は碑が残っているのみ。

## 【東求女塚古墳】

前方後円墳の後円部がポツンと残る東求女塚古墳　2006.9.6.

明治 36・37 年の阪神電車敷設の際に封土を削り取られ後円部の一部だけが公園の中にポツンと取り残され、昭和 57 年、隣接する遊喜幼稚園の園舎改装工事に伴って行われた発掘調査で、前方部の墳丘の裾部と周濠が発見され、また、公園整備に伴う調査で後円部の裾部も残っていることがわかり、前方部を北西に向けた全長約 80m の前方後円墳で、墳丘の斜面には石が葺かれていたことがわかったという。

東求女塚古墳から出土した遺物は、銅鏡・車輪石・剣・玉などで、明治時代の壁土取りの際発見されました。

これらの遺物は、現在、東京国立博物館に保管されているが、出土した遺物から 4 世紀後半と考えられている。

しばらく　公園の端にすわり、六甲を眺めながら、歩いてきた３つの古墳の主に思いをはせる。伝説にある悲恋の物語は後で作られたものであろうが、それにしても３つの古墳が真ん中の乙女を真ん中に左右対称に寄り添うように建っているのは、いかにも伝説が生まれそうである。

それにしても、突如として、３世紀末から４世紀この地に現れ、畿内王家・初期

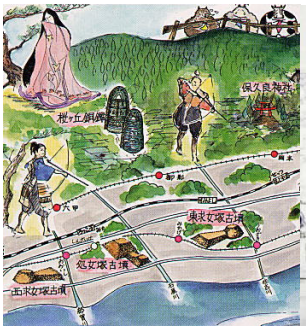
大和王権と密接につながった豪族とは誰だったのだろうか・・・・「鉄」につながる豪族だったのだろうか
この時代　積極的に鉄とかかわった出雲・吉備また新羅天日槍の伝説の残る但馬・丹後の王か・・・・
でも　ほとんど　古代初期　鉄の痕跡のない神戸が　山陽道「鉄の道」の要衝であったと考えると痛快である。
また、この六甲の裏、丹波・但馬から日本海へ続く道にも三角縁神獣鏡を埋納する古墳がある。
　但馬には新羅天日槍の伝説が残る鉄の国であり、但馬出石の古墳からは埋納された「砂鉄」がみつかり、すぐ隣の丹後には次の時代日本最古の精錬鍛冶の痕跡が残る鉄鍛冶の大コンビナート遠所製鉄遺跡がある鉄の国。
この道筋もまた、大和王権にとっては重要な鉄の道だったろう。文化的には出雲に染まらなかったこれらの国の意味付けはどうだったのだろう。
　大和王権が成立する前夜３世紀後半　大和纏向に集まり、同盟していった大和王家・出雲・吉備そして西日本各地の王国。ひょっとして　邪馬台国・卑弥呼の謎　記紀神話に隠された大和王権成立の謎をこの 2 つの古墳時代の和鉄の道が解き明かしてくれるかもしれない。
なんとなくうれしい気分で古墳を後にする。
今日は　酒蔵を少し回って、試飲をさせてもらって、灘の酒かってかえろう・・と南へ酒蔵の街へと足が向く。

酒蔵の町並み　御影郷　　菊正宗記念館・白鶴など　　2006.9.6.

鉄の通った道として三角縁神獣鏡を今まで見たことがありませんでしたが、教えてもらうとそんな道筋が、強く浮かび上がってくる。
　神戸がそんな解き明かしの鍵になると考えるとうれしくなる。ついでながら、わが故郷　尼崎の水堂の里にも三角縁神獣鏡が出土している。難波ノ津から山陽道と北の但馬へ向かう道との分岐が尼崎である。
　そんなことも考えながら　ほろ酔い加減で酒蔵の道を後にしました。

東求女塚古墳出土の鏡

2006.9.6.午後　酒蔵の町並みをほろ酔い加減で
Mutsu Nakanishi



## 1.3. 古墳時代　和鉄の道　異見・私見

**1.　吉備・出雲そして但馬と大和王権成立への役割**

**2.　物部氏　吉備ルーツ説と　前方後方墳は物部氏の重要拠点進出の証か・・・**

ほんとうかどうかわかりませんが、私の今一番惹かれている考え方を想像をふくめ、書いて見ました

### 1.　吉備・出雲そして但馬の大和王権成立への役割

**これらの主要王国と大和王権を結びつけたのは「鉄」でなかったか・・・**

大和王権が成立する前夜３世紀後半　卑弥呼の時代　大和盆地の端三輪山の麓烏田（からすだ）川と纒向川に挟まれた扇状地につくられた、古墳時代前期の大集落遺跡である。しかし、纒向遺跡は大集落遺跡といいながら、ムラを構成する住居址や倉庫址は発見されておらず、遺跡を囲む環濠もない。しかも、弥生時代の集落は存在せず、古墳時代前期（３世紀初頭～４世紀）になって急激に発展し、周辺の古墳群の築造が終わる頃には衰退する。

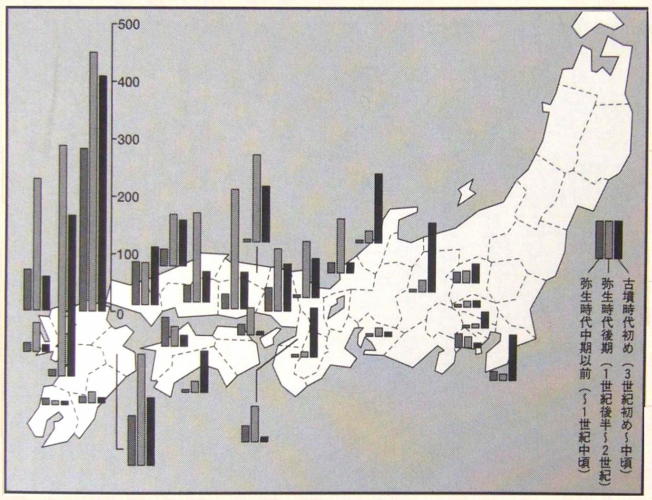
纒向遺跡周辺図

箸墓古墳以外の纒向古墳群は、前方後円の形をしているものの、前方部が短く未発達なため特に「纒向型前方後円墳」と呼ばれる。定型化した前方後円墳が造られる前の墳丘形式とされ、築造時期はいずれも３世紀に遡るものと考えられている。このため、纒向古墳群は我が国最古の古墳群とされ、３世紀になって新しく開発された場所に築造され、その中心が邪馬台国であるとする邪馬台国近畿説の主張となっている。

纒向遺跡から出土した土器８４４個のうち１２３個（１５％）が東海・山陰・北陸・瀬戸内・河内・近江・南関東などから搬入されたものである。またそれまで大和になかった特異な煮炊具も十数個出土しており、他地域との交流が推定される。これら外来の土器は南九州から南関東にいたる日本列島各地のものであり、中でも東海地方の土器が最も多く、朝鮮半島の韓式土器も出土している。

これらから、纒向遺跡は南関東から瀬戸内海西部までの広範な地方から人民を動員して古墳を築造するために、天皇王家を核にした諸王国の共同事業であったと考えられる。　そして、大和に突如として出現した巨大前方後円墳が、北九州に起源をもつ剣・鏡・玉の副葬、吉備に始まる特殊器台や特殊壷、また吉備や東瀬戸内に出現した竪穴式石室、出雲の四隅突出墳に見られる葺石、畿内の周溝墓などを総合するかたちで成立していることもあわせ、ここに大和王家を中心とした連合国家が成立し、その象徴として　前方後円墳が連合支配地域にひろがっていった。これらの発掘事実が神話として語られてきた「記紀神話」「出雲神話」に照らして、脚色はあるにしろ、史実と考えるべき事と考える人が多くなってきている。

また、「鉄」の視点から考えると　これだけの土木工事であり、必要とする「鉄」も生半可でない。これら纒向連合が朝鮮半島から供給される鉄素材の覇権を一手に握った結果だと考えられている。



**県別に見た鉄器の出土数（古墳時代・弥生時代中期以前・後期）**

関裕二著「物部氏の正体」より

弥生時代鉄の集積のない大和に古墳時代初め急激に増大
弥生時代後期以降山陰に鉄があふれ出す

この３世紀頃日本では　各地に地方王国が起こり、倭国大乱の時代である。鉄の自給ができず、大陸・朝鮮半島に鉄素材を頼っていた。そして、地理的に近い北九州が先進地とて半島の鉄を支配していた時代　大和は鉄に窮していた。　当時　半島においても内乱の時代　渡来人が数多く日本に渡ってきて、製鉄技術の探求が進められてきたと考えられるが、鉄素材を加工して製品にする鍛冶技術は急速に進展したものの製鉄の技術は門外不出として秘密のベールに覆われ、日本に

は伝わらなかった。しかし、出雲や吉備には北九州との交流や半島との直接交流により、大量の鉄が蓄積されるが、大和へは供給しなかったと考えられる。

**但馬の「鉄」の存在が纏向に集まった倭王権連合を一つにしたのか???**

大和は必死に鉄の確保に走ったと思われるが、北九州の勢力が根元で日本各地への供給を止めてしまうとどうにもならなかった。ところが、新羅との交流伝説がある鉄の王国但馬出石の王の墓　入佐山３号墳（４世紀の方墳）には砂鉄が数々の鉄器とともに埋納されているのが見つかった。隣国丹後は早くから大和と交流を持ち、次の時代日本で一番早く製鉄・精錬がはじまる古代の大製鉄地帯である。

出石　入佐山３号墳出土の砂鉄ほか　出土品

日本独自の製鉄原料「砂鉄」が埋納されていることから、「この但馬・丹後では北九州地帯とは関係せず、いち　　早く日本で製鉄が始まり、かつ　朝鮮半島の鉄も直接独自ルートで鉄を手に入れられるようになったのでないか・・・・」と想像したくなる。（吉備もこれに加担していたかも知れぬ）

　このルートで「鉄」を手に入れられるようになった大和は「出雲」を脅し、大和王家を中心とした連合を勝ち取り、西日本一体から北陸・東海にいたる大王国を築き上げていったと考えられないか・・・・・

　但馬出石入佐山の砂鉄を見たときに　そこに立ちすくんで　そんなことを考えていたのですが、多くの本を読むと可能性として　同じようなことを考えている歴史学者らがいることを知りました。そして　歴史作家　関裕二氏は数々の作品の中でこの視点をとらえ、実に明快に記紀神話・出雲神話の謎解き　そして吉備＝物部氏であるとの説をとなえ、絶えずその中心に物部・吉備がいたと主張している。

私も右へ行ったり、左に傾いたりですが、「鉄」から見てきた種々の検討をつなぎ合わせると現在ではこの関氏の説に一番共感しています。

**参考資料**


関裕二著「物部氏の正体」

環日本海歴史文化シンポジウム「渡来の神　天日槍　」

神戸市埋蔵文化財センタ　公開講座「考古学を学ぶ」資料

Mutsu Nakanishi 和鉄の道・Iron Road

和鉄の道Ⅰ　丹後の国　もう一つの邪馬台国　大陸と日本を結ぶ鉄の大加工基地　遠所製鉄遺跡

風来坊　Ⅳ　但馬　天日槍の国の歴史とコウノトリを訪ねて

和鉄の道Ⅴ　弥生の博物館 鳥取県 青谷上寺地遺跡を訪ねて　　弥生時代後期　北九州と並ぶ鉄の先進地「山陰」

和鉄の道Ⅵ　コウノトリが大陸と日本を結ぶ　古代　和鉄の道　　「古代　和鉄の郷　但馬　出石」

## 2.　物部氏　吉備ルーツ説と　前方後円墳は物部氏の重要拠点進出の証か・・・

「物部氏はどこから大和にやってきたのか・・・」はよくわかっていない。

記紀神話では物部氏の祖は「ニヒハヤギ」。

天皇家が大和に来る前にすでに天磐船に乗って大和に舞い降り、生駒山山麓の河内を根拠地としている。

神武天皇東征のときに、やってきた天皇王家に大和をゆずり、大和が建国されたといい、通常の豪族とは違う別格の豪族の位置にいたとされる。また、物部氏は金属精錬に従事する集団であり、「金属冶金」と深いかかわりを持っていたと考えられており、この先進技術をもって大和へ移ってきたとも考えられる。

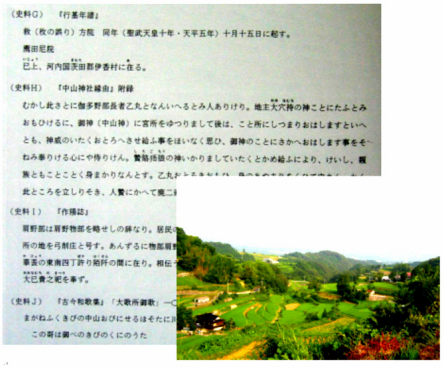
一般的には　物部氏は「九州からやってきた」とされ、「出雲からやってきた」とする説もあるが、関裕二氏は「物部氏の正体」の中で、「物部氏=吉備」とすると非常に多くのことが見えてくるという。　物部氏は大和建国以来　大和王権の中で、勢力を拡大し、九州・瀬戸内から山陰・東海・北陸・越にまでもその勢力を伸ばしていったが、その出自については謎である。

当時　2 世紀後半から３世紀にかけて　魏志倭人伝の時代　朝鮮半島では楽浪郡・帯方郡を経営して南朝鮮諸国を統制してきた漢王朝が倒れて大混乱が起こる。南朝鮮諸国に鉄を依存していた日本もこの混乱に巻き込まれ、倭国大乱が誘発される。そして、４世紀はじめ、高句麗と百済により楽浪郡・帯方郡が併合消滅し、戦乱の半島三国時代が続いてゆく。

大和王権を含め、日本各地の諸国も鉄の覇権をめぐって、この戦乱に巻き込まれてゆくことになる。特に物部氏は瀬戸内海の通商路を完全に握っていたことが、その勢力の根源にあるともいわれる。瀬戸内海を握った吉備・物部と日本海側を握っていた出雲が大和について、北部九州勢力との力のバランスが逆転したとも考えられる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての西日本諸国の鉄の蓄積の劇的な変化がこれを物語る。

物部が吉備だと考えると、ニギハヤギが天磐船で舞い降りたとする生駒山北端の肩野物部の関連地が岡山県誕生川流域にある。いずれも日本でいち早く鍛治加工の技術が展開されたところである。



美しい棚田の久米南町北庄　　古代　吉備の産鉄地帯　誕生川流域

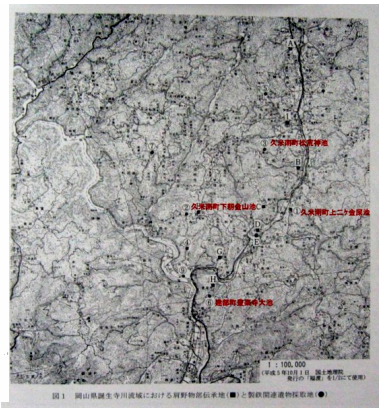


図１　岡山県誕生寺川流域における肩野物部伝承地（■）と製鉄関連遺物採取地（●）

「日本書紀」に、素戔嗚尊が八俣大蛇を斬った剣を、「十握の剣」とか「蛇の麁正（おろちのあらまさ）」とか「韓鋤（からさび）の剣」、「天蠅研（あめのははぎり）剣」と呼び、これは今、「石上にある」とか、「吉備の神部（かむとものお）の所にある」と伝えている。

「石上」というのは、通常、和珥氏系春日氏と物部氏の奉斎する奈良県天理市の石上神宮（石上坐布都御魂神社）のこととされているが、延喜式神名帳が吉備国赤坂郡の条に記載する、現在の赤磐郡吉井町石上の「石上布都之魂神社」のことだとする説がある。

吉備が古代より刀工の地であり、和珥氏・物部氏と何らかの関係があったことが分かる。

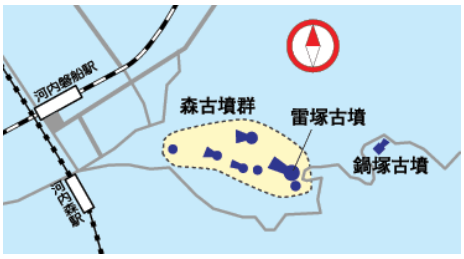
また、天理の石上神宮に 1000 本の剣を収めた五十瓊敷入彦命は息長氏系の皇子であり、それを補佐したのは、息長氏と同族の和邇氏の春日市河で、この人は物部首（おびと）の祖であるから、両氏族との関係もあるといわれる。

また、吉備の石上神社の社家も現在まで物部姓で、和邇氏の春日市河の子孫だと思われる。

大和の象徴となった前方後円墳のルーツは吉備楯築遺跡にあり、古墳時代初期には前方後方墳も数多く作られている。

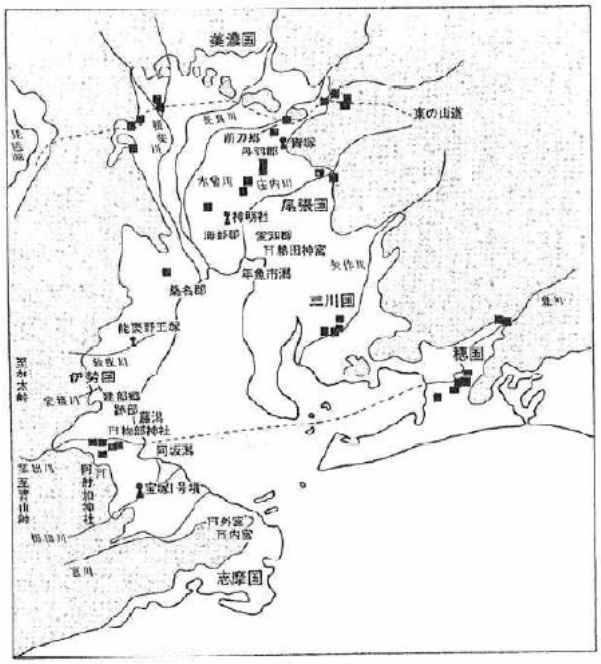
「　この初期　前方後方墳の築造主は物　部氏でなかったか・・・・
　　特に、大和王権の拡大とともに重要拠点を押さえるために
　　進駐した物部氏の墳墓であれば、楽しくなってくる。　　」

妄想かもしれないが、もし、そうであれば　神戸東求女塚古墳・求女塚古墳の位置づけもはっきりしてくる。
そんなことで、前方後方墳について　調べると同じようなことを示唆する文献にぶち当たりました。




● ニギハヤギが天磐船で舞い降りたとする生駒山北端の河内磐船にこの地にいた製鉄鍛冶集団が築いた３世紀末から４世紀にかけて作られた森古墳群がある。
その多くは前方後円墳なのですが、一番古い３世紀末頃の鍋塚古墳は前方後方墳である。
Mutsu Nakanishi　和鉄の道・Iron Road
和鉄の道Ⅴ　北河内 の古代の郷 肩野物部氏の本拠地 交野界隈 walk　　河内の森製鉄遺跡のある河内磐船の古墳群
大和王権 を支えた鍛冶工房　森製鉄遺跡を訪ねて

● 白石太一郎氏は濃尾平野以東の東日本各地に古墳時代前期前半に営まれた古墳は、前方後方墳が多く、弥生時代終末期には、前方後方墳の祖形である大型の前方後方形墳丘墓が濃尾平野で営まれていたと述べ、大和王権に後から加わった地方豪族たちを区別して前方後方墳を作らせたのではないかと私見を述べている。
この流れ地方制圧の主力は物部氏。地方豪族のみならず、自らの一族をも地方拠点に進駐させていたのではないだろうか????　そんな痕跡が初期の前方後方墳では????



前方後方墳の分布と本項関係地名
(赤塚次郎『東海の前方後方墳』『古代』86 の図に追記)

● 上記白石氏の考え方が一般的なのかもしれませんが、一方　この東海地方の前方後方墳の遺跡分布から次のように物部氏の系譜であるとする説もある。
　東海地方の前方後方墳を見ると近江から美濃へ抜けるルートに早い段階から作られ始め、三重では雲出川下流域　愛知県では矢作川・豊川沿いに多い。
このように前方後方墳は大和王権が東国へ勢力を伸ばしてゆくときの重要な場所に分布しており、大和王権の軍事を担った物部氏に関係する人の墳墓であろう
国土交通省 中部地方整備局 東海幹線道路調査事務所情報提供サイト
環伊勢湾の交流と文化　2.1.　環伊勢湾の海の道・川の道・陸の道

● 前方後方墳の副葬品を眺めてみると、次のものがある。
（玉類）ガラス小玉、管玉、勾玉、丸玉、小玉など
（供献土器）壺型土器（底部に穿孔のある物を含む）、器台、小形丸底壺、高坏、二重口　縁壺など
（祭祀用器具）車輪石、石釧、鍬形石など

（武器類）鉄剣、鉄刀、鉄斧、鉄鏃、鉈など。

（鏡）　小形倣製鏡、倣製四獣鏡、珠文鏡、重圏文鏡、内行花文鏡、画文帯神獣鏡、き鳳鏡などのほか三角縁神獣鏡がある。

（注）日本古代遺跡辞典（吉川弘文館）ほかより拾い出した４０基の主要前方後方墳の副葬品をまとめたもの。

【鏡を副葬した前方後方墳】

勅使塚古墳（茨城県）、丸山古墳（茨城県）、愛宕塚古墳（栃木県）、大日塚古墳（栃木県）、駒形大塚古墳、（栃木県）、那須八幡塚古墳（栃木県）、下侍塚古墳（栃木県）、元島名将軍塚古墳（群馬県）、国分尼塚古墳（石川県）、小平沢古墳（山梨県）、弘法山古墳（長野県）、東之宮古墳、（愛知県）、筒之古墳（三重県）、向山古墳（三重県）、芝ケ原古墳（京都府）、長法寺南原古墳（京都府）、西求女塚古墳（兵庫県）、西山古墳（奈良県）、新山古墳（奈良県）、金崎古墳（島根県）、岡田山古墳（島根県）、御崎山古墳（島根県）、備前車塚古墳（岡山県）、楢原寺山古墳（岡山県）、三成古墳（岡山県）

● 「日本書紀」も、素戔嗚尊が八俣大蛇を斬った剣を、「十握の剣」とか「蛇の麁正（おろちのあらまさ）」とか「韓鋤（からさび）の剣」、「天蠅研（あめのははぎり）剣」と呼び、これは今、「石上にある」とか、「吉備の神部（かむとものお）の所にある」と伝えている。

「石上」というのは、通常、和珥氏系春日氏と物部氏の奉斎する奈良県天理市の石上神宮（石上坐布都御魂神社）のこととされているが、延喜式神名帳が吉備国赤坂郡の条に記載する、現在の赤磐郡吉井町石上の「石上布都之魂神社」のことだとする説もある。

吉備が古代より刀工の地であり、和珥氏・物部氏と何らかの関係があったことが分かる。

また、天理の石上神宮に 1000 本の剣を収めた五十瓊敷入彦命は息長氏系の皇子であり、それを補佐したのは、息長氏と同族の和邇氏の春日市河で、この人は物部首（おびと）の祖であるから、両氏族との関係もあるだろう。吉備の石上神社の社家も現在まで物部姓であり、和邇氏の春日市河の子孫だと思われる。

このように確かな証拠はないが、製鉄技術集団を伴う物部氏が大和王権の重要拠点に進駐してゆく過程で築かれたと考えると西求女塚古墳の位置づけもはっきりする。

そして　播磨に入ると、御津町には大和を象徴する三角縁神獣鏡（古形式）を副葬し、かつ吉備で発生した特殊器台型埴輪をもつ権現山５１号墳（播磨）が前方後方墳である。また、播磨の綾部山３９号墳も方形或いは前方後方墳とみられ、かつ三角縁神獣鏡より古いとされる画文帯神獣鏡をもつ。このように神戸から播磨にかけて　瀬戸内海の通商路　主要な港周辺に三角縁神獣鏡出土地や前方後方墳がある。

**参考資料**


関裕二著　「物部氏の正体」

国土交通省 中部地方整備局 東海幹線道路調査事務所情報提供サイト

環伊勢湾の交流と文化　2.1.環伊勢湾の海の道・川の道・陸の道より

Mutsu Nakanishi 和鉄の道・Iron Road

和鉄の道Ⅴ　北河内の古代の郷 肩野物部氏の本拠地 交野界隈 walk

大和王権を支えた鍛冶工房　森製鉄遺跡を訪ねて

和鉄の道Ⅴ　弥生の博物館 鳥取県 青谷上寺地遺跡を訪ねて

弥生時代後期　北九州と並ぶ鉄の先進地「山陰」